

## ●優れた仏教文化定着

国富町には古墳が多い。特に「本庄四十八塚」の呼称で知られる本庄台地には多数の古墳が分布する。高塚、地下式、横穴合わせて五十七基を数える。国指定の文化財でもあり、これらの古墳が東西に細長く伸びる台地上に、約二千五百戸の集落と同居して分布する例は珍しい。ここでは古墳が身近に、しかもごく普通に存在している。

そのせいか、この町の古墳は墳丘上に神仏を祭ったものが多く、それが本庄古墳の特徴とされている。古墳の里に生きた人々は、こうすることで先人をしのび、その墳墓を守ってきたのであるう。その知恵の深さを思わずにはおれない。

古墳と同居する集落は、どのようにしてつくられたのだろうか。

二本の道路沿いに東西二<sup>キ</sup>におよぶ中心集落



国富町の畑作地帯。古墳時代からの先人の知恵が息づく

は二つの核集落からスタートしている。六日町と十日町である。もともと台地は水を得にくいため、人が住むには不向きな場所なのだが、そこに地下水位の高い部分があると事情は変わってくる。学問上は宙水という。本庄台地では六日町と十日町が宙水、つまり浅井戸で水が得られる場所なのである。

ここに核集落が発生、六日町は西都方面、十日町は八代方面への交通のかなめとなり、周辺地域との関係を深めながら発展した。

この地域的发展を背景に、本庄台地に寺院が建立され始める。万福寺(天台宗)蔵の国指定文化財「弥陀三尊蔵」、あるいは近くの三弓堂に残る県指定文化財の「如来立像」や「聖観音像」は、いずれも鎌倉期から南北朝期にかけての作というから、中世初期以降すでにこの地に、優れた仏教文化が定着し始めたことを教えてくれる。

江戸期、本庄が幕府の直轄領になると、天領の有利さを追い風に、集落は発展した。六日町と十日町には豪商が輩出、江戸中期以降には、大淀川流域経済の中心的役割を担うまでになった。

今の国富町は農業の町である。川沿いの水田地帯ではキュウリなどの施設園芸、台地の畑作地帯ではタバコや千切り大根の栽培が盛ん。近年は養鶏や肥育牛など畜産分野の伸びも著しい。そんな農業の町に世界的な先端技術を誇る「富士通ロジステイクス宮崎事業所」が立地している。良質な水が進出の決め手という。農業を育てた本庄川は今、先端産業をも育て始めている。

杉尾良也